

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 中村哲先生と法政大学沖縄文化研究所

著者	増島 宏
雑誌名	沖縄文化研究
巻	31
ページ	263-264
発行年	2004-08-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015947">http://hdl.handle.net/10114/00015947</a>

# 中村哲先生と法政大学沖縄文化研究所

増島 宏（法政大学名誉教授・元常務理事）

『沖文研』創立期の事情については、中村総長のもとで、研究所を所管する常務理事をしていたので、すでにその概略を述べた（研究所所報第五一号）。しかし、大学内外の嵐のような激動の時期に、あえて『沖縄研究資料センター』の膨大な資料を受け継ぎ、研究所設立を決意した総長の意図はどこにあったのであろうか。

先生が法政大学にきたのは一九四六年であり、戦後法政の再建途上であった。法文学部の教授として、法学部設置の責任を一身に背負うこととなった。国法学ないし国家学から新しい憲法・政治学への脱皮が唱えられる中で、必要な人材の確保に努力した。現在の法学部の基礎を築いたことになる。

六〇年代から七〇年代にかけては、理事・総長として、大学の解体を叫ぶ大学内外の勢力に対して、毅然として対処し、学問思想の自由、大学の自治を守り通した。戦後民主主義の旗手は新しい暴力に対しても揺らぐことはなかった。多摩地区の開発など教育環境の整備にも多くの力を注いだ。

僕が常務理事として総長のもとにあったのは、こうした激動の十余年であった。どんな多忙の中でも、先生は学問・芸術・文学などへの強い関心を失うことはなかった。独特な、シニカルな語り口の中に深い洞察を示していた。政治学を専門とする僕は何気ない会話の中にも強い刺激を受けることが多かった。先生は政治を単なる権力をめぐる対立としてではなく、広く生活や文化の中でとらえることを主張した。若くして住居の近い柳田国男邸に出入りしていたこともあって、先生は民俗学に特別な期待と関心を持っていた。柳田に関する多くの著書、論文、座談などがあるが、

日本人が黒潮に乗って台湾、沖縄を経て島伝いに到来したとする『海上の道』説にも興味を示した。先生は台北帝大時代の経験と沖縄とをつなぎ合わせ柳田説を発展または再検討しようとする年来の希望をもっていた。いずれにしても沖縄は昔も今も広くアジアと日本を結ぶ十字路である。先生があれほどまでに研究所の設立に執念を燃やした動機は、少年時代からの柳田への憧憬、民俗学と結合した新しい政治学研究開拓の意図があったのであろう。

また、先生は人との出会いや会話を楽しみ、どんな人に対してもわけ隔てすることはなかった。大学の教職員に対しても気軽に声をかけた。こうして大学内外に多くの知友を得たのである。中野好夫先生が私財を投じて収集した貴重な沖縄資料を無償で中村総長に託したのも、二人の人間関係に負うところが大きい。

いま、研究所は創立者を失うことになったが、沖縄の研究は立派に受け継がれている。安江孝司所長のもとで、中村先生の遺志がさらにさらに生かされることを期待したい。